

○ふみの日（2001. 7. 23）

目の御不自由な方は、指の皮膚といった器官の感じる紙面の凹凸感を感じて、文章理解能力を保ち、地域社会性を身に着けているが、普通の一般人には、意思の疎通、感情の対応等は、耳と口と言った互いの器官が、また、手の指と目と言った互いの器官が相補に助け合い、意思の疎通、感情の対応を行うのが、一般的である。そこから、文字といったものが、発達していたと考えられる。日本の場合、いうなれば、大和魂というか、鎖国時代からの儒教の、即ち、精神力の影響が、理解する力より、命令する形で重んじられ、戦前からユトリ教育前まで、前者が中心であり、組織もそれに比例して、無論、強かった。その意思疎通は、その事に関して、考える暇、ユトリさえも、あまり持ち合わせていなかった。その後のユトリ世代の人達は、意思の疎通は誤りの無いよう、西洋に影響され、また、漫画が発達して、文章の近くに図、絵を添付して、深い理解が重んじられるようになった。私どもの郵趣の変遷では、それを如実に知ることが、太古の昔、時代の書状に遡り、知ることが出来よう。しかし、電子メールの場合、歴史的変遷が時代的に考証するには少なく、そもそも耳と口の意思の疎通から始まり、近年の電話・電報に由来して、一時、ファクシミリと形を変えて、発達したわけで、格調ある文体は使われずに、5W1Hを重んじる文面、即ち、ニュース性が特徴付けられて、感情の起伏は、巧妙でなく、感情の爆発は、怒りの“炎上”しかない状態である。手で書く筆迫力さえ感じる感情豊かな郵趣関連に、何時、電報等に歴史の発端を持つ電子メールは、追い越して、郵趣を過去の遺物とするだろうか。それには、基本的人権を含んで、ルール、マナー、モラルに対して、自然と経験的に導かれたイギリスの大英憲法、マグナ・カルタみたいな慣習的憲法化が、当然の事として待っている事だろう。ペンを持って書くことは、呆けの封じにも良いと聞いたことがある。ペンを持って、子供の頃から、学習、遊びに活かして生きていたなと思う。

# 日 本

ふみの日  
2001. 7. 23.

